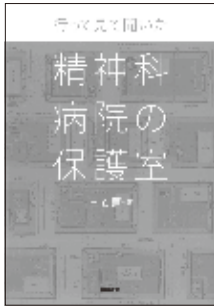


## ■ 書 評



### 行って見て聞いた 精神科病院の保護室

三宅 薫 著  
医学書院 2013年4月  
152頁 定価2,940円

大変面白い本が出たものである。国内外の病院見学で、必ず皆興味を持つ場所は保護室であると思うが、保護室の情報公開というのはあまり聞いたことがない。以前に看護の雑誌に保護室の特集がされたときに、興味を持つてのぞいたことがあり、この本の著者がこうした保護室の調査を行っていることは知っていた。しかしこうして35病院の保護室が1冊の本となると圧巻である。これらの病院は2006年から2011年にかけて著者が調査に訪れた病院で、つてなどもあり無作為抽出というわけではなく、関東周辺を中心としているがそれも手造りのよさがある。A4サイズの見開き1面に、わかりやすい図面と、ドアやトイレや窓から見える風景など何点ものカラー写真が掲げられ、病院の概要・ドアや鍵の構造・排せつ・窓・空気・光・食事と水分補給・寝具・清潔・防音・観察のしやすさ・プライバシー・建築上の配慮と課題・その他、という項目について細やかな聞き取り調査の結果が書き込まれている。一目で、「保護室でどのような医療・看護が行われているか」がわかるのである。その視線は、著者が看護師であるところから、主に看護師の姿勢や意欲や安全性からのものであるとともに、常に保護室を利用する患者さんの立場からも点検するものであり、居高に保護室の持つ犯罪性を摘発するといったたぐいの調査とは一線を画している。精神科での勤務を経験した専門家であるなら、「そうなんです、いろいろわかってくれてありがとう。私たちももっと工夫してみますね」と共鳴しそうな本であり、そこが筆者の狙いであるように思われる。評者もそうした人間味のある、温かい、ちょっとした保護室の工夫をたくさん取り上げている本書の姿勢

にとっても共感を覚えた。

そうはいっても、ページを繰るごとに出てくる保護室の写真に、正直のところ不条理さやうまく表現できないが生理的な違和感のようなものを感じた。それは精神病性興奮といった極限状況において、何とか病人の回復をはかろうとしつつ、同時に自他の安全を守ろうとするぎりぎりのせめぎ合いの中で、保護室が「やむを得ず生まれてきたもの」だからだと思う。2010年にWHOが世界各国で、どのような病気が生命の維持や生活への負荷となるか調査を行っているが、さまざまな身体疾患よりも精神病急性期の方が重い影響があることが報告されている。健康な状態が0、死亡が1とすると、肝がんの末期状態0.519、心筋梗塞急性期0.422、重篤な脳梗塞0.567、重篤なてんかん0.657などとなっているが、重篤なうつ病エピソード0.655、統合失調症急性期0.756（残遺期0.576）となっており、いかに重い障碍と認識されているのかが、よくわかる。この本の著者は、「一番良いのはどこの病院ですか?」と聞かれるが、「その答えはない」「どこの病院に行ってもそこなりの取り組み方に感じ入ってしまう」と書いている。本書を見るとそれが良くわかる。医療・人権・快適さなどさまざまな視点で相反する要請があり、正解がないのである。その中で、少しでも快適に過ごせるように、という看護の視点が込められているのが本書の特徴であろう。

巻末に、「保護室における生活の援助とは」と題して、清潔、食事、開放観察などの項目に分けて、35病院での工夫や筆者のコメントが書かれ、すぐれたまとめになっており、医療環境の中での生活援助について深く考えさせられた。これはこれまで筆者がいろいろな学会で調査を報告してきたものが土台になっているようである。たとえば「患者さんが寝る場所に土足で入るのは抵抗があるので、保護室に入るときには履物を変えます」という病院の紹介など、視線がこまやかである。そうした心配りの中で、ゆっくりと安心感や信頼感が醸成され、苦しい急性期からの回復が起こってくるように評者には思われる。

(池淵恵美)